

斎藤喜博教育思想の基底としての前半生（Ⅱ）

佛教大学大学院 教育学研究科生涯教育専攻 博士後期課程 増田 翼

はじめに

私は、前稿（『佛教大学教育学部学会紀要』第7号）¹⁾において、斎藤喜博（1911-1981）の生誕地、群馬県佐波郡芝根村川井（現、群馬県玉村町川井）の地理的、自然的風土及び文化的風土を探ることで、彼の教育思想の基底としての前半生を辿り始めた（第1章）。今回は、これに引き続き、家族からの影響（第2章）と、子ども期の斎藤喜博（第3章）について見ていきたい²⁾。

第2章 家族からの影響

1. 祖父からの影響

斎藤喜博の父方の祖父・斎藤甚平（1833-1878）は、「霞城」という画号を名乗り、絵を描き、著述をして暮らしていた。甚平の妻・ともとの間には、長男・素平（1857〔安政4〕年7月25日生）、二男・道蔵（1871〔明治4〕年6月28日生）がいて、この二男・道蔵こそが斎藤喜博の父に当たる。甚平はあまり働かず、また家のことは少しも構わなかった。そのため家は荒れ果て、屋根は痛んで雨漏りがするほどであったが、甚平は、その下で傘をさして平気で絵を描いた。斎藤喜博によれば、山岡鉄舟（1836-1888）——江戸城無血開城の立役者と評される人物——と甚平が親しかったという話が伝わっていたらしいが³⁾、剣、禅、書の達人として知られる一方で無欲を貫いたという山岡の生き方は、

たしかに甚平の生き方と共通する点が多い。もしかすると、そうした部分に互いの接点を見出し交際していたのかもしれない。

ところで、甚平が数え年46歳という短命で亡くなったために、斎藤喜博自身は祖父に一度も会っていない。けれども、斎藤は、祖父が「塾〔漢学の塾：論者註〕などで子弟の教育もした人⁴⁾」で、「教育者であると同時に、芸術家であったこと、しかも進歩的思想に共鳴する人物であった」こと、さらには小さいうちから祖父の話を聞かされていたことなどもあって、「一度もみたことのない祖父だったが心には大きな影響を受けていた⁵⁾」と述懐している。後年、斎藤は、偶然祖父の絵をみる機会があった。彼はそれを、「想像以上に気品のある、しかも鋭く反骨的なところもある絵だった⁶⁾」と述べている。想像の域を超えることのない祖父の像に頗る共鳴し、また祖父の絵から反骨的精神を読み取ろうとしている点からしても、斎藤喜博——とりわけ教職に就いた後の斎藤——にとって祖父は、自分の進むべき道を教示してくれる存在だったと言えよう⁷⁾。

2. 父からの影響

父・斎藤道蔵（1871-1949）と、母・斎藤けむ（1874-1962）との最初の出会いは、「玉村町の大きな店に二人で養子にはいった」ときであった。ところが、「その家は姑がきちんとした人で、作法などもきびしく、「その上使用人もたく

さんいたので、気づかいも多く、仕事の量も多かった」ため、「母親〔けむ：引用者註〕は堪えられなくなって藤岡在の生家へ逃げ帰ってしま」い、道蔵も「そのあとを追って逃げ出し、二人で母〔けむ：引用者註〕の生家の近くで世帯を持った」のである⁸⁾。けむの生家は、「農家としては格式のある家」で、「ふつうの百姓は門のところで草履をぬいではいった⁹⁾」と言うから、道蔵と出会うまでは何不自由なく生活を送ってきたのだと思われる。一方の道蔵は、まだ幼いころにその父・甚平を亡くしたために——田畑や広い家屋敷はそのほとんどを親類が分け持つことになり、狭い屋敷あとだけが残った¹⁰⁾——他の家にあずけられ育っていて、生涯、貧しい生活を強いられた。二人の出会いはその後、斎藤を含めた六人の子どもの誕生へとつながっていく¹¹⁾。

父・道蔵は竹細工職人であった。「職人氣質で世間を狭く渡るタイプの人間¹²⁾」だったと斎藤は述懐している。また他方で、道蔵は「子はんのうであった」らしく、常々子どものことを気にかけて、とても細々した点にまで口を挟んでいたようである。たとえば、斎藤に、「男の子は眉毛が下がってはいけな」と言っ「指につばをつけては眉をなで上げさせた」り、「頭かしらになれるように頭あたまを食え¹³⁾」と言っ煮干しや鰯を必ず頭ごと食べさせたりした。他にも道蔵は、まだ小さい斎藤を心配して、禁止事項(……してはいけな)をたくさん言い渡していたようである——「私の父親は、まだ小学校へ出ないうちから遊び友だちも制限していた。『誰と遊ぶと悪い子になるから遊んではいけな』とって遊ばせない子が何人もいた。隠れてそういう子どもと遊んだことがわかとひどく叱られるのだった」、「兄が小さいときに木から落ち、あごの下に大きな傷をつくったことがあったというので私はいっさい木のぼりは禁じられていた¹⁴⁾」、「あぶないからというので、水

車小屋に行くことは禁止されていた」——。もちろん、少年斎藤も、父の言うことに素直に従っていたわけではない。「ひとりでそこ〔水車小屋：引用者註〕に行つては、水の流れや、水車の回るのをみているのがすきだった」、「速い水の流れと、まっ黒な大きな水車が、くりかえしくりかえし回っているのをみていると、何か別の世界にいったような気がして、水車のそばに腰かけて、いつまでもいつまでもみていたのだった¹⁵⁾」とあるように、父に隠れて自分だけの世界を築いていたのである。

さてこのように、子どものことを常々気にかける父・道蔵であるが、他方、自分の生活や仕事の面となると、なかなか気難しいところがあったようである。60歳の斎藤喜博が、その歳になっても忘れることなく鮮明に想起する父の姿は以下のようなものであった。

父は竹細工職人だったが、河川工事の蛇籠づくりなどで、ずいぶん遠くまで仕事に行っていたようである。けれども幼いころの私の記憶の中の父は、あまり働きものではなかつた。……仕事に行くようにと母が父に嘆きくどいていたのを、私は悲しいさびしい気持でみていたのを覚えている。ようやくのことで仕事に出かける仕度をしたが、急に「いけな」などといい出し、道具をほうり出して寝こんでしまった父の姿なども、淡いさびしい記憶として残っている。……父は短気な人間だった。何かというと大きな声で怒りを出していた。けれどもほんとうのところは氣弱で涙もろい人間だったようである。……父は母が帰ってくる〔世間的な交渉ごとから：引用者註〕まで、家でしょんぼりと待っているだけだった。そのくせ母が帰ってくると氣の強いことをいっていた¹⁶⁾。

道蔵は、仕事面や生活面において何かとわがままに振る舞うことがあったし、他にも母・け

むにばかり働かせて自分は脇から文句をつける
 といったことがあったために、少年斎藤は心から父を尊敬できなかったようである。おそらく、少年斎藤にとっての父親は、意固地でありながら気弱な一面を持つという矛盾多き存在だったに違いない。そしてまた、このような矛盾を孕んだ父親をどのように理解すればよいのかという戸惑いを、斎藤は、その子ども期だけでなく、それこそ父が没するまで感じ続けていたのである¹⁷⁾。完全なる信頼を寄せられない、あるいは尊敬のまなざしを向けられない、そうした父親に対する想いを、斎藤は次のように詠んでいる。

老いさらばひてなほ性卑しき父のごとわれも
 なりゆき憎まるるにやあらむ 1937年¹⁸⁾

時に憎み時にあはれみわが父と口を利かずに
 年を経にける 1937年¹⁹⁾

荒々しきこと言ひながら涙もろき父と知りつ
 つ親しまざりき 1939年²⁰⁾

憎まれつつ慇懃して密に父が貯へし金はも
 う幾ら位ならむ 1940年²¹⁾

あの屋根の下に父をりと思へども今日は友ら
 とわが遊び過ぐ 1948年²²⁾

気兼しつつわが家に幾日かいし父のリヤカー
 に乗りて帰り行きたり 1948年²³⁾

父親との不和が解消したのは、残念ながら、道蔵の死を過ぎてからのことであった。斎藤は、父親の死に際して、以下のような短歌を詠んだ。

不仕合せな一生と思ふぼろの上に在りしが如
 く父は眠れり 1949年

死にてしまへば父もやすけし白ひげのまばら
 になりてあどけなく見ゆ 1949年

われをただたのみたのみて生きていしことを
 思へばあはれなる父 1949年

気短き常の気性もをさまりてあかつき方に死
 に行きにけり 1949年

能なく憎まれ過ぎし父なれど素直なりき人間
 的なりき 1949年

土になりとこしへにやすもるさ思ふは今の
 われには楽しかりけり 1949年²⁴⁾

道蔵の亡くなった1949（昭和24）年ころは、斎藤の言動が、戦前と比して異なる性格を見せはじめる時期に当たる。詳しくは今後の考察に譲るが、父親を受容する気持ちが湧いてきたことと、斎藤の言動に変化が生じたこととの間には、何らかの結びつきがあるように思われる。父親のことを「能なく憎まれ過ぎし」と言いつつも、「素直なりき人間的なりき」と認めた斎藤、また眠りゆく父の姿を見ながら「今のわれには楽しかりけり」と死を受容する斎藤の心の内は如何なるものであったのか。後に島小（佐波郡島村小学校、1955年からは境町立島小学校）を辞め、疲弊しきった斎藤が詠んだ短歌の中に父親が登場する歌がある。

昭和五年にわが父が買ひくれし時計持ち三十
 四年勤め来しかな 1964年²⁵⁾

新任教師として佐波郡玉村尋常高等小学校へ赴任した1930（昭和5）年からずっと斎藤の実践を見守ってきた時計には、父親に対する斎藤の複雑な想いが染みついているように思われる。最後まで父と正面から向かい合うことのできなかった後悔と、しかし、父の存在が今の自分を支えているという実感が彼の心の片隅にあったのではないだろうか。

ところで、斎藤が父・道蔵から学んだことの一つに、職人が仕事をする際の〈勘〉のはたらきとその重要性があった。斎藤の回想の中には、「東栄寺という天台宗のお寺」が「新しく本堂をつくったとき」の「棟梁のことを父はよく話していた」という一節がある。その棟梁が「弟子たちの掛矢の音をきいて、『そんなたたき方

をすれば、ひびがはいってしまう』と、門の外からどなりながら走って行った」という話を、道蔵が斎藤に聞かせたというのである。ここで道蔵が強調したかったことは、「掛矢の音を遠くで聞いただけで、仕事のしづりがわかった²⁶⁾」棟梁の〈勘〉の鋭さであろう。おそらく斎藤は、この他にも、身近な職人たちが〈勘〉を頼りに仕事を成し遂げていく話を、父から幾度となく聞かされたはずである。斎藤は、父を通して、〈勘〉のはたらきとその重要性を感得していたのである。このことをよく表すかのように、斎藤は、その著作の中で、種々の仕事において見られる〈勘〉に着目することがよくある。たとえば、以下のような文章である。「その熟練工のいうのに『これは決して肉眼で見るのではない。勘で見わけのだ』ということであったが、これなども仕事としての真剣な練習のたまものであって、つくづくと心打たれる²⁷⁾」。さらに彼は、後年、「とくに授業をする教師にとっては、カンとか洞察力とかがないことは、致命的な欠陥となる²⁸⁾」と述べ、教師にとっての〈カン〉の重要性について考察している——ここで言う「洞察力」は、母・けむから授かった力だと思われる。この点には次項で触れる——。このように、〈カン〉のはたらきに着目しながら教育を語っていく後年の斎藤の教育思想の根底に、父からの影響が潜んでいることはたしかであろう。

3. 母からの影響

働くこともままならない父とは対照的に、母・けむは「気丈で働き者」で、近所の農家を手伝いに回ったり——「田植えのときには田植えの手伝いに行き、お蚕のときには桑つみの手伝いに行った。繭かきの手伝いにも行ったし、稲刈りの手伝いにも行った。十一月になると、稲こきが夜まであった」——、着物の賃縫いをしたりして父の代わりに家計を支えていた。斎藤は、そうして手伝いに回る母親と一緒に行動するこ

とが多かった²⁹⁾。「私は幼いころは、母の仕事をしているところへよく遊びに行った。そして母の仕事のそばでひとり遊びをしたり、夕方いっしょに家へ帰ってきたりした。また、母の帰りが遅いので、夕方迎えに行って、しばらくたってからいっしょに帰ったりした³⁰⁾」。おそらく斎藤は、母に寄り添いつつも、単に母の愛情を求めるだけではなく、農家の様々な仕事内容や近所の大人同士の人間関係などを窺っていたに違いない。

近所の農家に依頼されるあらゆる仕事を難なくこなすことのできた母・けむには、秀抜な洞察力、判断力、意志力、さらには想像力が備わっていた。とりわけ得意な和裁では、縫うときに一度着物をほぐしてみてもそれで見当をつけて縫い直していたらしく、師匠に習うということもせずに、「たいがいのことがよく考えればできるものだ³¹⁾」と考え実行していた。もちろん、母のこのような実践スタイル——とりあえず様々な事柄にぶつかり、その中で熟考し、反省し、判断していくというスタイル——は、少なくとも斎藤の実践観に影響を与えているはずである。また、斎藤がその生涯一貫して抱いていた価値観——自らを高めようと努力していくことに意義を見出す価値観——の基礎を築き上げたのも母親であろう。なぜなら、貧しい状況下でも生きることには希望を見出し努力している母の姿を、斎藤は日々、目の当たりにしていたはずだからである。こうした母の生き方は、「まごころでやれば方法はどうだってよいのだ、まことをもって子どもに対すれば方法は少しは悪くもまちがっていても子どもは必ず受け入れてくれるのだ。子どもは必ずよくなるのだ³²⁾」と言い切る斎藤——とりわけ戦前の斎藤——の言葉に受け継がれているのである。

母の死は1962(昭和37)年1月3日で、斎藤51歳のときであった³³⁾。斎藤は、父の死や、次姉の死の際に短歌を詠んでいるのとは違って³⁴⁾、

母の死に際して、何も詠まなかった。はじめて彼が母の死について短歌を詠んだのは、けむの死後9年目となる1971（昭和46）年であった。

気強く働きつづけ年老いし母にも仕合わせは
つひになかりき 1971年³⁵⁾

またさらに10年後の1981（昭和56）年、彼自身死を迎える間際に詠んだ短歌に母が登場する。

子に気がねしながら気弱く死にし父あきらめ
の中に安らに死にゆきし母 1981年³⁶⁾
ジャガイモと青き竹の子をとともににすがし
き母の記憶につながる 1981年³⁷⁾

斎藤が母の死を受けて書き綴ったものは管見の限りこの三点のみである。自らの死の直前に、ジャガイモと竹の子を煮ている清々しい母親の姿を想起する斎藤にとって、母親の温かな存在がいかに大きかったかは言い尽くせるものではないだろう。母から贈られ続けた限りない愛や、母と一緒に寄り添うようにして近所の仕事を手伝いに回った日々の思い出は、斎藤喜博の生きる原動力となって、その生涯を支えていたのである。

4. 兄弟姉妹からの影響

斎藤喜博は、六人兄弟の四番目として生まれた。彼が生まれたとき、16歳ちがいの兄・英一はすでに生家を離れていて、14歳ちがいの長姉・ぶんと7歳ちがいの次姉・つる（1904-1976）がいた。英一は、群馬県で小学校教師を経験した後、当時委任統治領であった南洋庁で小学校校長を務めた。それからさらに台湾へ渡ったが、敗戦後、日本に帰ることなく、1946（昭和21）年2月13日に台湾にて病死している——弟・幹夫もまた、群馬師範学校を卒業後、群馬県で教

師を務め、その後兄と同様、南洋庁テニアン小学校に渡った。しかし、太平洋戦争時に、テニアン島のカロリナス高地で戦死している（1946年1月30日に遺骨が帰国）³⁸⁾。斎藤からすれば、二人の男兄弟を海外で失ったことになり、その寂しさは計り知れないものだったであろう——。長姉・ぶんは、家で伊勢崎銘仙の手機を織っていたが、19歳で藤岡町の従兄のもと（母・けむの生家の分家）へ嫁いだ。斎藤が5歳のときのことである。小学生（尋常科）になった斎藤は、長い休みの度に、藤岡にいるぶんのもとへ泊りに行っは、親戚の人々に可愛がってもらった³⁹⁾。

次姉・つるは、兄弟姉妹の中でも、とりわけ斎藤の教職への道を開いた一番身近な人物である。つるは、1919～1920（大正8～9）年の間、「動的教育」の実践を重視していた下川淵小学校に代用教員として勤めていたことがあり、群馬県内でも早いうちから〈大正新教育思想〉に触れていた一人である。さらにこうした関係から、つるは、当時群馬県内で下川淵小学校と並んで「動的教育」の実践に力を入れていた佐波郡剛志小学校の校長、宮川静一郎（1890-1971）⁴⁰⁾を知っていた。そこでつるは、群馬師範学校在学中の斎藤喜博に対して、「宮川校長というすぐれた校長がいる」、「宮川校長のところへいくのがよい」と薦めたのである。その後、県視学を務めていた遠縁の者が宮川と話を決めていたこともあって⁴¹⁾、斎藤は、1930（昭和5）年時点で宮川が校長を務めていた佐波郡玉村尋常高等小学校へ赴任することとなったのである。宮川静一郎との出会いが、斎藤の教育思想に影響を及ぼしたという点は、いくつもの先行研究が認めている⁴²⁾。だとすれば、それ以前の宮川と斎藤との出会いを導いた次姉・つるの存在をも見逃すべきではないだろう。

ところで、そもそも斎藤が教職に興味を抱いたのも、兄・英一、次姉・つるが教職に就いていたことが大きく関係しているようである。斎

藤は、小さいうちから兄、姉の教師姿を目にしており、単純に〈教師〉という姿に憧れを抱いていた。あるいはまた、父親が「教師がよい」と口ぐせのように言っていたこともあり、尋常小学校1年生のうちに、斎藤の夢は「先生」であったという記述も回想録には見られる⁴³⁾。いずれにせよ、六人の兄弟姉妹のうち、四人が教職に就いていることからして、本人たちの意志はもちろんのこと、それ以上に兄弟姉妹の間で、何かしら影響の及ぼし合いがあったのはたしかであろう⁴⁴⁾。

第3章 子ども期の斎藤喜博

斎藤は、幼いころから「おとなしい子どもだ」とよく言われていた。それは彼曰く、「いつも私は長姉や次の姉に遊ばせてもらったり、姉の友だちに遊ばせてもらったりしていた」ために「女の子のような子どもになっていた⁴⁵⁾」からであった。彼の晩年の短歌には次のように詠まれている。

ほうせん花の実をはじけとばし遊びたる女の
如き幼年時代なりき 1981年⁴⁶⁾

さらには「おとなしいから坊さんになるとよい」とお寺から勧められることもあった。このように子ども期の斎藤は、彼自ら語っているように、「気弱い無口な少年」、「おとなしく無気力な子ども⁴⁷⁾」だったのである。さらに1916(大正5)年、彼は脚にできた内癰の手術を受けたために、完治するまで他の子どものように走り回ることができなくなり、今まで以上に一人で遊ぶようになってしまった。「毎日狭い庭で蟻の行列をみたり、龍のひげの実をとって遊んだりしていた⁴⁸⁾」という彼は、たいへんおとなしい性格のまま、1917(大正6)年、芝根尋常高等小学校尋常科に入学することとなったのである。

さて、このように「気弱い」、「無気力な」性

格の斎藤は、さらに3月20日の遅生まれだったこともあって、「身体も心も弱々しい子ども」で、「他の子どもとけんかをするなどほとんどできず」、「学校へいくのがすきではなかった⁴⁹⁾」。後の回想では以下のように述べている。少し長いが引用する。

私自身のことで振り返ってみると、子どものときに非常に体が弱かったのです。しかも七つ上の姉がいて、姉の友だちとばかり遊んでいたから、大変おとなしかったのですね。意気地なしだったわけです。子ども仲間というのは、意気地なしのやつをいじめるのが好きですね。こいつはいじめがいがあると思うと、寄ってたかっていじめる。私なんか大いにいじめられたわけですよ。そのいじめられた経験というものが、なんか私自身を形成したというふうな気がします。人間へのいたわりとか、自分自身をいとおしむとかいうものが、そういう中でつくられたという感じをもちますね⁵⁰⁾。

小学校一年生のときのことである。……先生がまだこないときに、私はひとりの力の強い同級生に、後ろから床の上に不意にたたきつけられてしまった。いたくて起き上がれずにいると、先生が来た。そして「こんなところに寝ている」と、ひどくしかられてしまったことがあった。……私はそのときの悲しみが、いまでも心の底に深く残っている。……悲しみだけは傷あとのように残っている。そしてそういう記憶があるからこそ、どんな場合でも事実を正確に見なければいけないという気持も、強く持つようになったのだ⁵¹⁾。

「人間へのいたわりとか、自分自身をいとおしむ」という人間の生存にかかわる感覚を、いじめられることによって学んだという斎藤。床の上に不意にたたきつけられ、さらにその状態

を先生に「寝ている」と勘違いされ叱られるという悲しい出来事を通して、「事実」とは何であるかという点に執着するようになった斎藤。皮肉なことに、斎藤喜博教育思想の根底には、こうした負の経験を通じて学んだことも横たわっているのである⁵²⁾。

ところで、「気弱い」、「無気力な」性向はまた、誰にも侵されない一人きりの時間と場所を好む少年斎藤をつくり上げていく。

わたしは子どものころ、雲の動きを一人でよくみていたことがある。瞬間瞬間にさまざまに形や色が変わっていくのを見るのが楽しくてならなかった。雨がつぎつぎと落ちてくるのをじっとみつめていると、同じ雨であるのに、大きいつぶがあったり、小さいつぶがあったり、早く落ちてくるものがあったり、ゆっくりと落ちてくるものがあったりして、それをみていると不思議でならなかった。それらのものをみているときのわたしは、他のすべてのことを忘れて、自分だけの一人の世界にひたっているのだった。そういう一人の世界を持つことによって、わたしはずいぶん人間形成をしてきたように思うのである⁵³⁾。

一年生や二年生のときには、休み時間でもいつでもひとりで遊んでいた。校舎の蔭に隠れるようにしていたり、校庭の南のはたへ行って、ひとりで水の流れをみたりしていた。……私は花の咲かないときには、その藤棚の南でひとりでよく遊んでいた。……ふだんは人があまりゆかないので、ひとりで遊ぶにはよいところだった。だれにも犯されない自分の場所のようだった⁵⁴⁾。

斎藤は、子ども期だけにとどまらず、後年においても一人きりで過ごす時間を好んだ。彼には一人きりの時間こそ至福のときであり、また

一人きりで佇むときこそ一番落ち着ける時間であった。あるいは、こうした一人きりの世界が、斎藤も言うように、彼自身を形成していたのである。加えて彼は、〈流れ〉や〈変化〉を見つめることが子どものころから好きだったようである。この点も見逃してはならない重要な箇所であろう。つまり、静止しているもの（対象）を観察しスケッチするよりも、すべての事象が変化のなかに置かれていて感じるの方が、彼には興味深かったのである。

斎藤が小学2年生になった年（1918年）は、鈴木三重吉（1882-1936）が『赤い鳥』を創刊した年でもある。この『赤い鳥』をはじめとして群馬県下には文芸教育運動——童話やおとぎ話を教育に取り入れようとする運動——が広まるが、それは「お伽学校」、「夏季学園」といった学校外での活動にとどまっていた⁵⁵⁾。また斎藤が小学3年生（1919年）のときには、山本鼎（1882-1946）が長野県で第一回の児童自由画展覧会を開いている。群馬県下においてその運動は、群馬師範学校教諭、斎藤始雄によって展開された。彼は1920年に『自由画教育の実際』、1921（大正10）年に『図画教育における四大改造』を刊行し、群馬県教育に自由画教育の運動を広めていくのであるが⁵⁶⁾、斎藤の回想によると、このような教育の変化は、「片田舎の小学校までは、なかなか影響が及んでこな」かったという。実際、斎藤の受けた図画教育は「臨画」のままであった⁵⁷⁾。

斎藤が5年生、6年生のときの担任教師は、熊谷先生であった。斎藤はこの先生に関して、次のように回顧している。「私たちのクラスは、この先生に教わるようになってから、急にまとものあるクラスになっていった」、「先生が、若い情熱を私たちのクラスに傾けつくした」、「私たちを教えているときの先生には、……張りがあ、喜びがあった」と。また熊谷先生は、特に跳箱が得意で、体操の時間になると、常々、

何段も重ねた高い跳び箱を飛んで見せた⁵⁸⁾。この熊谷先生の姿は、鮮明な記憶となって斎藤の脳裏に焼きつき、後年の彼の跳び箱指導の際の潜在的なモデルとなったと考えられる。他にも斎藤は、次のように述べている。「熊谷先生に教わっているころ私は、『飛行機』といわれたことがあった。これは先生に指名されて教科書の文章を朗読するとき、ひどく早口で読んでしまうので、『飛行機のように速い』という意味だった。私はあいかわらず無口だったが、先生に指名されると、立ち上ってすらすらと教科書の文を読んでしまったのだった」と。斎藤は、小さいころから本が読みたくて仕方がなく、「毎晩両親に新聞を声を出して読んでやっていた……また、猿飛佐助とか、何冊もつづいている忠臣蔵などを毎日のように親や近所の人に読んでやっていた」、「目にふれるものは、どんな本でも手あたりしだいに読むという状態だった」、「教師になっていた二番目の姉の本なども盗み読みした⁵⁹⁾」という。したがって、字を読むことには優れていたはずであるし、そのためにひどく早口で読んでしまったのだろうが、ここで大切な点は、普段無口であった少年斎藤が、熊谷先生に指名されると「すらすらと教科書の文を読んでしまった」ということである。おそらく、熊谷先生の存在と熊谷学級の雰囲気とが、斎藤の学校生活を苦痛なものから楽しいものへと変えつつあったのである。斎藤は、熊谷先生をたいへん慕っていたであろうし、だからこそ、「飛行機」と言われた記憶も鮮明に想起することができたのである——実際、病気で熱が下がらない熊谷先生のために、みみずを煎じて飲むとよいと聞いた斎藤は、冬の寒い日、あちこちの土を掘り返して「みみず」を探すほどだったのである⁶⁰⁾。

1923(大正12)年、斎藤は芝根尋常高等小学校高等科へ進む⁶¹⁾。この年の9月には、関東大震災が起こった。家の荒壁は波打ち、校舎の壁

が落ち、校庭に地割れができるなどの被害があり、いく日もの間、余震が続いた。また、芝根村は都会を流れる情報などに疎く取り残されているような場所だったために、まったくのデマが噂として飛び交い、村は大混乱に陥った⁶²⁾。まだ小さな斎藤にはどうすることもできない問題であったが、閉塞的、封建的な農村の現状が、種々の悲しい事件を引き起こしてしまうのであった。

ところで斎藤は、その当時の学級の様子を次のように描写している。「ある日私は先生に指名されて、教育勅語の全文をそらで黒板に書いていた。そのころは歴代の天皇の名を暗誦したり、教育勅語を暗唱したり、教育勅語をそらで書いたりすることが大事な勉強になっていたのだった⁶³⁾」と。あるいは、麦飯にたくあん、梅干しだけといった弁当や、さつまいもを新聞紙に包んで持っていくという日々であった。クラスの中では読書熱が盛んで、徳富蘆花(1868-1927)の『みみずのたはごと』、『自然と人生』などを読むことが流行していた⁶⁴⁾。こうした学級の様子以外にも、斎藤は、その当時の芝根尋常高等小学校の雰囲気について「そのころの芝根小学校は、若い熱心な先生が集まっていた。何か一生けんめい勉強しているようでもあった。だから生徒も、そういう先生たちの空気を身体で感じていたのだった」と書いている。たしかに、芝根小学校の教師たちは新たなものを取り入れようと「創造教育」の研究に励んでいて、「研究論文が県で入賞し」たこともあった。斎藤自身は、授業に特別な変化がなく「自由詩などをしきりに書かせるようになったことと、クラスでの討論会などがよく行われるようになったことが、かわったことくらいのものであった⁶⁵⁾」と言うが、こうした芝根小学校の教師たちの熱心な取り組みが、少なからず斎藤に影響していたことは間違いない。

このころの斎藤はクラスで一番背が高く、身

体の成長著しいときであったが、他方、尋常科のころのように、孤独を愛する性格は幾分和らいだに過ぎなかった。「高等科になってからは私は、走りっこも早くなったし、行動もいらか積極的になっていた。けれどもやはり、内気で、人の前でははっきりと口のきけない人間だった。いつでも自分にひけ目を感じ、ひとりだけになっているような子どもだった⁶⁶⁾」のである。

【註】

* 『斎藤喜博全集』（国土社、1969-1971年）、並びに『第二期斎藤喜博全集』（国土社、1983-1984年）からの引用は、それぞれ『全集』、『第二期全集』と記した上で、巻数とページ数及び原典を示すにとどめる。

- 1) 拙稿「斎藤喜博教育思想の基底としての前半生（Ⅰ）」『佛教大学教育学部学会紀要』第7号、佛教大学教育学部学会、2007年、225-235頁。
- 2) 「はじめに」（『佛教大学教育学部学会紀要』第7号、225-228頁）において少し触れたが、もう一度、斎藤喜博の前半生をどのように解釈し理解していくのかまとめておきたい。本稿で重視するのは、斎藤喜博の前半生と後の教育思想との連関である。第2章で言えば、家族からの影響の中に彼の教育思想の源流を探ることになる。また第3章で言えば、斎藤の子ども期における経験が後の教育思想とどのように連関するのかを明らかにする。斎藤の教育思想の基層を形成している前半生の歩みを辿ることで、我々のよく知る斎藤喜博の原点、原動力を見出すことが可能となるであろう。

前半生と後の思想との連関を分かりやすく表現した文章として、たとえば、ディルタイ(Wilhelm Dilthey: 1833-1911)の次の一節を引用しておきたい。「子供の頃のあの時この時の幼い生き生きとした姿の記憶の糸をたぐると、ひそかに覚悟をし、確固たる気持をもって、世間に向かい自説を主張していく大人としての自分にまで至りつく」(ディルタイ著、尾形良助訳『精神科学における歴史的世界の構成』以文社、1981年、229頁)。

なお、第2章、第3章の考察に当たっては、斎藤自身がその前半生について書いた以下二点の回想録を主に参考にする。

- ・『全集』12、83-443頁(原典:『可能性に生きる』文藝春秋社、1966年)。
 - ・「少年のころの記憶」『全集』12、1971年、5-82頁。「少年のころの記憶」は『全集』12のために新しく書き下ろされた。39年間の実践を終えた斎藤(1969年3月に校長職から退いた)の視点から回想されている。
- また、斎藤以外の他者が、彼の前半生に触れた著書には以下のものがある。
- ・氷上正『斎藤喜博の短歌と人間』国土社、1974年。
 - ・笠原肇『評伝・斎藤喜博』一莖書房、1991年。
- 3) 『第二期全集』11、460-462頁(原典:『開く』第19集、明治図書出版、1978年3月)。
 - 4) 『全集』1、481頁(原典:『教室記』、鮎書房、1943年)。
 - 5) 『全集』12、117頁(原典:『可能性に生きる』文藝春秋社、1966年)。斎藤は、著書『教室記』の後記において、「この本ができれば……一冊を祖父の霊前に捧げたいと思う」とまで記している(『全集』1、481頁〔原典:『教室記』〕)。
 - 6) 「少年のころの記憶」『全集』12、14頁。
 - 7) 笹本正樹は次のように言っている。「斎藤喜博にとって、祖父の霞城はみえざる教師であった、と同時に彼の成るべき人間像の道標としての役割を果たしたのである」と(笹本正樹『斎藤喜博の短歌と教育』『香川大学教育学部研究報告』第I部64、1985年3月、6頁)。
 - 8) 「少年のころの記憶」『全集』12、13頁。藤岡在で暮らしていた二人は、その後、川井に小さな家を建て、そこに住むようになった。これが、斎藤喜博の生家となる。
 - 9) 「少年のころの記憶」『全集』12、10頁。
 - 10) 同上、13頁。
 - 11) 斎藤喜博が生まれた1911(明治44)年3月20日の時点で、父・道蔵41歳、母・けむ38歳(どちらも数え年)であった。
 - 12) 「少年のころの記憶」『全集』12、14頁
 - 13) 同上、10-11頁。「姉が嫁ぐときなども、いろいろの前で、ひとりでしょんぼりと涙ぐんでいた」(「少年のころの記憶」『全集』12、9頁)というから、道蔵が、子どものことを本当に愛していた父親には違いないのである。
 - 14) 『全集』12、88頁。(原典:『可能性に生きる』)。
 - 15) 「少年のころの記憶」『全集』12、26-27頁。こうした道蔵からの禁止事項を列挙するだけでは、まるで権威主義的な父親のようにも映ってしま

いがちであるが、決してそうではない。むしろ道蔵を含め斎藤家の場合、権威主義的傾向、あるいは家父長主義的傾向はほとんどないと言ってよい。それというのも、第1章で触れたように、上州には「カカア殿下」という独自の風土、風習があり、そのため母親が家庭内でかなりの実権を握っているからである。道蔵にしても、けむの存在なくしては父たり得ないといった感がある。

- 16) 「少年のころの記憶」『全集』12、9頁。
- 17) 氷上正は、「父との相剋と嫌悪感、それは、性格やものの考え方の違いによるものでありながらも、世代の断層もあったのかもしれない」と考察している(氷上正『斎藤喜博の短歌と人間』国土社、1974年、61頁)。
- 18) 『全集』15-2、27頁(原典：『羊歯』草木社、1951年)
- 19) 同上、29頁。
- 20) 同上、36頁。
- 21) 同上、41頁。
- 22) 『全集』15-2、89頁(原典：『證』草木社、1953年)。
- 23) 同上、92頁。
- 24) 同上、97頁。
- 25) 「『職場』以後」『全集』15-2、249頁。
- 26) 「少年のころの記憶」『全集』12、56頁。
- 27) 『全集』1、44頁(原典：『教室愛』三崎書房、1941年)。
- 28) 『全集』9、291頁(原典：『私の授業観』明治図書出版、1969年)。
- 29) 斎藤は、心から母を信頼していたようである。とりわけ父との不和が長く続いたこともあって、余計に母との結びつきが強固だったのかもしれない。このことは、斎藤が母のことを詠んだ短歌を見るだけでも——父のそれとは明らかな違いがあることを——了解できるだろう。「子供の如く背中まるめてねむりいる母を見るかな夜半に帰って」(1941年)、「ふるさとの母を思ふにすぎゆきのただにはかなしとわれは思ひつ」(1947年)、「石河原ひらき乏しくささげ植うわが母が苦しみつくり来し畑」(1948年)。
- 30) 「少年のころの記憶」『全集』12、60-61頁。
- 31) 同上、10-11頁。他にも回想録には次のようにある。母親の生家には「剣術の巻物が伝わっていたが、女の子ばかりなので剣術を習うものがなかった。それで母は子どものときに、剣術の先生のところへ住み込みで習いにやられたが、

逃げて帰ってしまった」(「少年のころの記憶」『全集』12、10頁)。もしかすると、母親は行き当たりばったりの性格だったと同時に、世に背を向けて生きているところがあったのかもしれない。

- 32) 『全集』1、389頁(原典：『教室記』)。
- 33) この時期は、彼が「村への十年の約束」を果たし島小(境町立島小学校)校長を辞めるつもりでいた時期に当たる。しかし、結局は、ちょうど1月ごろから村の若い母親たちが次々と彼のところを訪れ、「もう一年だけいてください」と希望していき、「また、四月からは、近代映画協会が、一年間はいって、島小の記録映画をとるということも引き受けたので」、斎藤は、「つらくも堪えて、もう一年いようと決心した」のである(『全集』11、583-585頁[原典：『島小物語』麦書房、1964年])。
- 34) 次姉の死の際(1976〔昭和51〕年)に、斎藤は、「十月二十四日姉死す」と題して五つの短歌を詠んでいる。
- 35) 『第二期全集』12、9頁(原典：『草と木と人間と』一茎書房、1983年)。
- 36) 同上、40頁。
- 37) 同上、46頁。
- 38) 「少年のころの記憶」『全集』12、18-19頁。
- 39) 同上、16頁。
- 40) 宮川静一郎は1890(明治23)年、群馬県甘楽郡福島町の農家に生まれる。1911年3月に群馬県師範学校を卒業。同年4月より岩平小学校首席訓導となる。その後、岩平小、新屋小で6年間経験を積み、1917年4月群馬県女子師範学校附属小学校訓導へ。当時、五段階教授法を採る男子師範学校附属小学校に対し、女師附小は新教育の研究を始めていた。それは「授ける」という静的学習ではなく、「自ら学ぶ」という動的教育の研究であった。1920年、29歳で利根郡川場村の小学校長に、1923年には及川平治(1875-1939)の理論をもとにした動的教育の実践校、佐波郡剛志小学校の校長になる。そして1926年、玉村小学校の校長になってからは、木下竹次(1872-1946)の「合科学習」をもとにした「未分科学習」の実践を行った。1930年、そのような宮川のもとに新任教師として斎藤は赴任した。宮川との出会いによって大正新教育の一端に斎藤が触れることとなり、彼の教育観はもちろん、人間観そのものにまで影響を及ぼしたことは想像に難くない。詳しくは今後の考察に譲る。宮川について詳細は以下のものを参考とした。

- ・群馬県教育史研究編さん委員会, 群馬県教育センター編『群馬県教育史』第3巻、群馬県教育委員会、1974年。
 - ・唐澤富太郎編著『図説教育人物事典』下巻、ぎょうせい、1984年、130-134頁。
 - ・野瀬薫「〈研究ノート〉戦前期における斎藤喜博の教育実践の形成と大正新教育の影響」『教育学研究』第62巻第4号、日本教育学会、1995年12月、358-365頁。
- 41) 『全集』12、102頁（原典：『可能性に生きる』）。
 - 42) 野瀬薫、前掲論文。あるいは、横須賀薫『斎藤喜博人と仕事』（国土社、1997年、21-22頁）を参照。
 - 43) 『全集』12、87頁（原典：『可能性に生きる』）。斎藤が早い時期から教職を夢見ていたことは確かであるが、他にもいくつかの進路が彼の前には示されていた。たとえば、斎藤が尋常科のころ、「東京のある家の書生になれば、大学まで出してくれるという話があった」。そこで彼は、一時、中学受験勉強を志すのであるが、結局はその道には行かなかった。回想には次のように書かれている。「けれども私は、やはり学校の先生になりたいかった。書生になることもいやだったし、姉や兄が教師だったので、教師へのあこがれを強く持っていたからだ。それで私は中学の受験をしないことを先生に申し出した。高等科へ進み、師範学校を受験する気持ちになっていたのだ」と（『少年のころの記憶』『全集』12、70-71頁）。あるいは、「岩倉鉄道学校への進学すすめし父のこと貧しき記憶の中に思い出づ」（1970年）という短歌がある。いずれにせよ、斎藤の両親は、彼の立身出世を願っていたようである。「親たちも私に仕事をさせようとはしていなかった。学校の勉強をすることだけをのぞみ、過大に子どもの私の将来に期待をかけているようだった」（『少年のころの記憶』『全集』12、59頁）。
 - 44) 斎藤は、妹・ヒデ子に関する回顧的叙述をほとんど残していない。唯一、何首かの短歌を残しているのみである。
 - 45) 「少年のころの記憶」『全集』12、18頁。
 - 46) 『第二期全集』12、46頁（原典：『草と木と人間と』）。
 - 47) 「少年のころの記憶」『全集』12、18-19頁。ただし、一方で「案外に気の強いところも、強情なところもあった……また向こうみずで無鉄砲なところもあった」とも言い、よく知られているような芯の通った斎藤の気質も少なからず持ち合わ

せていたことはたしかである。たとえば、けんかになり斎藤を殴って逃げた真ちゃんを追いかけて無言で殴り返したという回想や、川原で遊んでいた時に近くに降りてきた飛行機に何とかして触ってみたいと思い、「とうとう縄〔人が近づけないように張ってある縄：引用者註〕をくぐって中へは行って行き、翼をたたいてみた」（『少年のころの記憶』『全集』12、18-20頁）という回想から彼の強情ぶりが窺える。また烏川向こうの埼玉県側の河原で花火大会があった日、有料の渡し舟には乗らず、着物を頭の上のせ裸になって川を渡ろうとしたが、途中で溺れそうになったという話——泣き声を聞いた渡し船の船頭が助けに来たことで、大事には至らなかった（『少年のころの記憶』『全集』12、22-23頁）——からは、彼の無鉄砲ぶりが了解できるであろう。強情な気質と無鉄砲ぶりは、父母からの影響によるものと思われるが、ともかくこうした性向が人前に表れ、信念を決して曲げない斎藤として特徴づけるのは、ずいぶんと後まで——30歳を過ぎるまで——待たねばならない。

- 48) 「少年のころの記憶」『全集』12、16頁。
- 49) 同上、41頁。
- 50) 斎藤喜博、林竹二『対話子どもの事実』筑摩書房、1978年、11頁。
- 51) 『全集』14、203頁（原典：『君の可能性』筑摩書房、1970年）。一年生の時の担任は和田光太郎先生であった。和田先生は「謹厳な先生」であったが、他方で「逸話を残すにふさわしいような先生」、「どこかのんきで、暖いところのある先生」（『少年のころの記憶』『全集』12、41頁）だったらしく、そのため余計に、先生に理解してもらえなかったという想いが募ったのかもしれない。
- 52) 子ども期斎藤が「気弱い」、「無気力な」性格であったという点は、彼の人間形成過程を理解する上でたいへん重要な点である。なぜなら、後年（1964年）、「生きた人間と人間の接触」の中で「衝撃を受けたり、はっきりしたり、否定されたりしながら、瞬間瞬間に創造が生まれ、目先が明るくなり、そのことによって自己を拡大したり変革したりしながら、それぞれの持っている可能性が引き出されていく」（『全集』6、53頁〔原典：『授業の展開』国土社、1964年〕）のだと主張する斎藤からすれば、「気弱い」、「無気力な」子ども期の彼はまるで別人であり、そのことから彼の人間形成過程において、いったい何が変わり、いったい何を辿ることの意義が見出されるか

らである。

- 53) 「教師の自由と責任」『全集』10、228頁。
- 54) 「少年のころの記憶」『全集』12、42-43頁。
- 55) 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編』9、1990年、188頁。
- 56) 同上、187頁。群馬県教育における自由画教育の広まりを物語るのは、クレヨンの急速な普及であるという。クレヨンを手にした「子どもたちは色を喜び、自由に容易に色塗りができるようになった」。もちろん、こうした動きの背景には「児童の個性を尊重、児童中心の自学自習の重視という大正新教育の流れ」があった。
- 57) 「少年のころの記憶」『全集』12、48-49頁。
- 58) 同上、63-64頁。
- 59) 同上、65頁。
- 60) 同上、66頁。
- 61) 斎藤は、高等科一年のはじめに、少しの間だが桐生東高等小学校へ通った。詳しい事情は分からないが、兄・英一が桐生北小学校の教師をしていた関係で、斎藤がしばらくの間、兄夫婦の借家にあずけられていたようである。その後すぐに、また芝根小学校へ戻っている。ちなみに、この当時、次姉・つるは桐生南小学校の教師をしていた（「少年のころの記憶」『全集』12、74-75頁）。
- 62) 「少年のころの記憶」『全集』12、73頁には以下のようにある。「朝鮮人が攻めてくるといううわさが村に伝わってきた。うわさにつづいて、朝鮮人が井戸へ毒を入れるから井戸に蓋をするようにという指令がきたりしたので、どこの家でもあわてて井戸に簾をかけたり、板で蓋をしたりした。・・・村に自警団がつくられた。自警団の人たちは、何人かずつで組んで、夜も昼も村を回っていた。そしてみなれない人間がはいってくると、朝鮮人ではないかといって詰問したりした。」このような事態の顛末は藤岡事件へと発展した。
- 63) 「少年のころの記憶」『全集』12、73頁。
- 64) 同上、77-78頁。
- 65) 同上、75-76頁。
- 66) 同上、78頁。